産経新聞　2020年8月6日（木）　夕刊

私と胸高鳴る人たち

青木崇高

伝統芸能に魅せられて

脚本家　藤本有紀さん

前略、藤本有紀さま

長かった梅雨も明け、ようやく夏らしい日がやってきましたが、いかがお過ごしでしょうか。

僕はこの度縁あって「伝統芸能」についてのコラムを書かせていただきました。藤本さん脚本の朝ドラ「ちりとてちん」で落語に出会ってから十数年。その間に出会ったいろんな「伝統芸能」について拙文ですが、実体験を基に楽しく書かせていただきました。

先日、久しぶりに「ちかえもん」を観直しましたよ。

近松門左衛門作の「曽根崎心中」初演の場面。元禄時代の観客たちは人形浄瑠璃の一つ一つの動きに息を呑み、時に悲鳴をあげ、涙を流しています。竹本座は大きな感動に包み込まれていました。今はコロナ禍で劇場に観客を入れることすら難しいので少し複雑な気分になりましたが、当時の人々は数少ない娯楽に日常を忘れて熱狂していたんだなあと改めて感じました。

僕が初めて歌舞伎などの「伝統芸能」を鑑賞したときは「ハハハこれで俺も立派な大人だな」などと余裕をかましていましたが、いざ幕が上がると、予備知識がないので内容が全く入ってこずチンプンカンプンでした。失礼なことに居眠りまでしてしまい、熱狂とは程遠いものでした。

しかしチケット代は勿体ないし、せっかくなら今度は音声ガイドを借りて勉強しながら観てみたんです。すると、ナルホド、そういうことなんだ。と部分的ですが楽しむことができました。何度も足を運ぶと観ることに余裕が生まれ、演者の美しい動きや装飾、演出の素晴らしさにも目がいくようになり、ついには感動で涙を流し会場との一体感を感じられるようにもなりました。今なら元禄時代の観客たちと一緒に嗚咽できるかもしれませんね。

そして気付いたんですが、「人生の経験」が「伝統芸能」の理解に大きく関わっていますよね。同じ演目でも数年後に観たものとは視点も感じ方も変わってくるんです。子供の舌には苦味でしかなかったサザエの肝の旨さに目覚めるように…。

「伝統芸能」は物語の強度が凄い。そこには長い歴史の中で決して削がれることのなかった「人間の本質」が存在しているのだと思うのです。だからどの時代でも人々を惹きつけ、その奥深さをいつまでも堪能することができるのではないでしょうか。NHK大河ドラマ「平清盛」の打ち上げで披露された友吉鶴心先生の「平家物語」の琵琶の演奏。人知れず涙していた藤本さんはあの時そういうものを感じていらしたのではないでしょうか。

私も「伝統芸能」の素晴らしさに魅せられたひとりです。もしこのコラムが若い世代に興味を持ってもらうきっかけになればこれ以上の喜びはありません。

そして私が「伝統芸能」について書くことができたのも「ちりとてちん」を生んでくださった藤本さんのおかげです。ありがとうございました。

草々　青木崇高（俳優）

＝おわり

画・青木崇高

藤本有紀さんは来年度後期のNHK連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」の脚本を手掛ける。「ちりとてちん」に続き、連続テレビ小説は2作目。そのほか、「平清盛」「夫婦善哉」など執筆多数。「ちかえもん」で第34回向田邦子賞を受賞。